

首里城地下 第32軍司令部壕



第32軍司令部壕の保存・公開に向けて

第32軍司令部壕は、戦争の残骸を知るとともに、平和の大切さを学ぶ平和教育の場としても貴重な戦争遺跡です。戦後80年近くが経ち、戦争体験者の証言を直接聞くことが難しくなることから、物言わぬ語り部である戦争遺跡の活用が求められています。

沖縄県は2023年7月に第32軍司令部壕保存・公開基本方針を定めました。この方針では、「文化財指定への取組」「文献資料等を活用した平和発信・継承」「平和教育・学習への利活用」などの7つの柱を立てています。沖縄県はこの方針に基づいて第32軍司令部壕の保存・公開に向けて取り組み、平和を希求する「沖縄のこころ」を国内外へ発信するとともに、沖縄戦の真相と教訓を次世代へ継承していきます。

沖縄戦の概要

沖縄戦は、アジア太平洋戦争末期の1945年に日米両軍が沖縄で住民を巻き込んで繰り広げた地上戦です。この戦争を指揮したのが第32軍司令部でした。

4月1日、米軍は沖縄島西海岸に上陸しました。米軍のアイヌバグ作戦（沖縄攻め作戦）では総兵力約5万人でした。対する日本軍の兵力はおよそ10万人、しかもその中には防衛隊や学徒隊、義勇隊など現地召集の補助兵力を多く含んでいました。激しい戦闘が展開され5月に入り米軍が首里に迫ると、第32軍司令部は南部喜屋武半島への撤退を決め、なおも戦争を続けます。

南部には地元住民のほか戦火に追われて避難してきた人びとがいました。「鉄の島風」と称される米軍の猛爆撃にさらされ、隠れた壕も攻撃の対象となり、住民と日本軍が混在する中で多くの犠牲を生むことになります。沖縄戦では県民の4人に1人が犠牲になり、民間人の死者は軍人を上回りました。

第32軍司令部壕はなぜ首里につくられたのか

第32軍は当初、那覇市安里の蒙永試験場に司令部を設置し、読谷村石嶺久保と南風原村津嘉山との2か所で司令部壕の構築を進めました。しかし1944年10月10日の米軍による空襲（十・十空襲）以降、砲撃や空襲に耐えられる強固な壕への移転が検討されます。その結果、新たに首里城の地下に司令部壕を構築することが決定されました。なお津嘉山の壕には、司令部のうち経理部など軍の後方支援をする部署が配備されました。

首里城のある丘は標高が高く、周囲の地形をよく見渡せ、かつ石灰岩の硬い岩盤からなるため、移転先の条件に合っていました。構築作業は12月9日に開始され、第2野戦築城隊を中心に、沖縄師範学校や県立第一中学校の生徒らによって行われました。1945年3月23日から第32軍司令部壕の本格的な使用が始まります。

沖縄戦第32軍司令部関連年表

1944年（昭和19年）

- 3月22日 大本営、第32軍を編成
- 3月25日 第32軍司令部、福岡で編成を開始
- 4月28日 第32軍、司令部を那覇市蒙永試験場に置くことを決定

8月10日 牛島満司令官兼任

- 9月 南風原村津嘉山で、戦術指令所の構築を開始
読谷村石嶺久保で、軍手続指令所の構築を開始

10月10日 米軍機による南西諸島空襲（十・十空襲）

12月3日 司令部を首里に置くことを決定
翌年1月中旬までに移転できるように準備を命じる

12月9日 首里城地下で第32軍司令部壕の構築を開始

1945年（昭和20年）

1月21日 司令部を首里の沖縄師範学校内に移転

2月15日 「第32軍戦術指令」を発表
「一機一艦船、一艦一船、一人十銃」の特攻作戦の発令

3月23日 米軍、南西諸島全境を空襲
第32軍司令部、首里城地下の第32軍司令部壕に入る

3月26日 米軍、阿嘉島・座間味島・慶留島に上陸

4月1日 米軍、沖縄島中部西海岸に上陸

5月4日 日本軍、総攻撃に出るが苦戦翌日、攻撃を中止

5月5日 第32軍、「天ノ懸戸戦術司令部」取組二部スル規定」を定める

5月22日 「新戦術計画」を策定し、喜屋武半島に撤退することを決定

5月27日 第32軍司令部壕を放棄、津嘉山に移転

5月30日 第32軍司令部、津嘉山から摩文に撤退

5月31日 米軍、首里を占領

6月19日 第32軍牛島司令官、関今各部隊は各島地における生存者の中上級者を指揮し最後迄戦闘し移入の大難に生くべしとの命令を下達

6月23日 第32軍牛島司令官、長参謀長唐沢（6月22日の説もあ）第32軍の組織的戦闘の終了

9月7日 米軍第10軍司令部（越来村森根）で降伏調印式

※戦闘としての沖縄戦はほぼ終わったが、島々や米軍の民間人収容地などでは銃えりマリアによる被害は続いていた。また多くの住民が首里に帰ることができていなかった。

南部撤退の決定

第32軍司令部は、沖縄戦における戦術を指揮し、住民の犠牲を拡大させた南部撤退の決定がなされた重要な場所です。

1945年5月4日、日本軍は米軍に総攻撃をかけますが苦戦、翌日には攻撃を中止します。司令部の置かれた首里の防衛は困難となりました。壕内では今後の作戦として、①首里決戦案、②知念半島撤退案、③喜屋武半島撤退案の3つが議論されます。そして5月22日、本土防衛のための時間稼ぎ（持久戦）を重視した司令部は、喜屋武半島撤退を決定しました。

あわせて定められた「新戦術計画」にもとづいて残された兵力を南部に再配置しましたが、もはや米軍と戦えるだけの戦力は残っていませんでした。しかも、第32軍は南部撤退の際に住民の非戦闘地域への避難を徹底しなかったため、住民の犠牲者は一気に増えました。また、軍民混在の状態となり、日本兵による避難壕内出しや食糧強奪、スパイ嫌疑による虐殺などもおこりました。

沖縄中南部での第32軍の戦闘経緯



発行者：沖縄県知事公室 平和・地域外交推進課
お問い合わせ先：TEL 098-894-2226
沖縄県専用HP：<https://32okinawa.com/>



2024年3月発行

第32軍司令部壕（首里）周辺 戦争関連遺跡マップ



第32軍司令部壕の構造

第32軍司令部壕は、沖繩県内の地下壕の中でも最長の壕を有しています。首里城が立つ丘の地下約10〜30mを南北に貫通し、壕の総延長は約1kmにおよびます。しかし、壕の一部が埋没しているため、詳細について解明されていない部分が多くあります。主となる坑道とそこから枝分かれしている部分に分かれます。北側に3か所、南側に2か所の坑口があり、また、将校室をはじめ参謀室、医務室、救助室、通信壕、作戦室、電話室など多くの部屋が配置されています。

壕内の天井や壁面は岩盤を掘り削って掘り込んでおり、壁面にはツルハシなどによる無数の痕跡のあとが確認できます。また、床面の一部には現在も、木が敷かれているのを確認できます。天井部分には地上へつながる立坑も数か所あったとされ、おもに連絡道や通気口として機能していました。

第32軍司令部の役割

第32軍は南西諸島の防衛のため1944年3月に創設されました。当初は航空作戦準備として飛行場建設をすすめることが主な任務でしたが、地上戦部隊が配備されると司令部は、各兵団・各部隊を統轄し情報収集・作戦研究や作戦準備を行いました。

司令部は最高指揮権をもち、参謀が作戦の計画・指導を行いました。これらに加え、電報機、電波探知機などの情報関係部隊、整備中隊や機動隊中隊などの守備部隊、軍医部、野戦築城隊、管理室などの支援部隊が構成されていました。

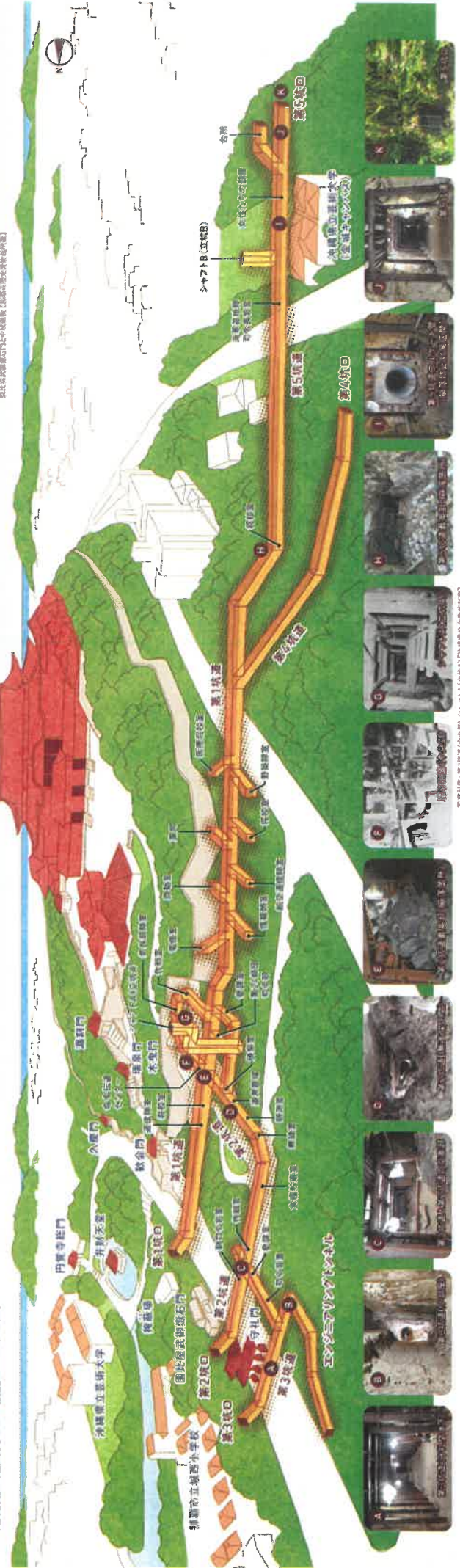
戦況に応じた意思決定を、軍事命令として指揮下の各兵団・各部隊へ伝達し、各部隊からの戦況報告を受けました。また、大本営などの上位組織に対して戦況を報告するなどを、第32軍司令部は文字通り「軍の頭脳」として機能していました。

消失した文化財

戦時の沖縄には国宝に指定された文化財が23件ありました。国宝建造物の数は京都と奈良に次ぐ3番目の多さで、全国でも有数の歴史と文化の宝庫でした。

とりわけ首里にはその大半が集中しており、首里城(正殿、守礼門など5件)、円覚寺(仏殿、総門など9件)、圓比屋武御殿(石門、井ヶ敷石門、栄名宮本殿)があります。ほかに、玉陵や中城御殿といった建造物や琉球文化の粋を集めた美術工芸品の数々も遺されています。しかしこれらは沖縄戦でことごとく破壊され、古器首里の町並みは焼け野原となりました。戦後、失われた文化財の復元が多くの人びとによって進められ、首里城や圓比屋武御殿石門などの復元が進み、かつての姿を取り戻しつつあります。こうした取組は現在も続いています。

写真1(左):円覚寺三門 写真2(右):円覚寺三門 写真3(左):中城御殿 写真4(右):中城御殿



※安全上の観点から、坑道内部や唯一確認できる第5坑口には立ち入ることができません。(2024年3月現在)

写真1(左):第5坑道(沖城壕) ショップ(左)は沖城壕の公営事務所

遺物から見た第32軍司令部壕

第5坑道からは、大きく分類して5種類の遺物が発見されています。

- ・爆弾り作業道具(ツルハシなど)
- ・日用品(一升瓶、お椀など)
- ・医薬品(薬品瓶など)
- ・武器(小銃、火炎放射器など)
- ・通信装置(通信機、受話機、バッテリーなど)

壕内のようす(証言から)

第32軍司令部壕における当時の証言は限られており、特に壕の中心部分における状況についてはほとんど証言が得られていません。壕内には1000名以上がいたとされ、多くの人が狭い壕内を行き交い、現地召集兵を待って睡眠を取っていたとされています。蒸し暑く、悪臭が充満していたとの証言もあります。

天井から多量の地下水が染み出していたため、坑道の脇に排水用の溝が掘られ、水を外へ出すよう工夫が施されていました。それでも湧き水と泥に悩まされ、十字紋やシャベルで壕外へそれらを盛り出していました。これらのことから、壕内の環境は決して良くなかったことがうかがえます。

また、南側の坑口近くに2基の発電機が設置され、近くの井戸水を冷却水として使用していたことから、壕内には電気が安定供給されていたようです。加えて発電機の近くには炊事場があり、食糧が山積みされていたといわれています。

